

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

呪い屋 零

邪淫の牙に妖華散る



小説 斐芝嘉和

挿絵 高浜太郎

プロローグ

第一章 羽賀退魔社

第二章 秘密結社ORGANNON

第三章 私立星辰学園

第四章 物部真人

第五章 宮内早苗

第六章 陵辱ビデオ

第七章 佐々木零

第八章 呪い屋

第九章 淫獣

第十章 輪姦

インターミッション

006

011

029

044

060

069

084

110

125

165

200

244

登場人物紹介

Characters



ささき れい
佐々木 零

星辰学園の一年生として留年し続けている問題児だが、呪術師としての腕は一流。偽悪趣味の皮肉屋。

みやうち さなえ
宮内 早苗

霊媒としての資質を持つ、小柄で童顔の少女。お人好しで内向的な性格をしている。無邪気なトラブルメーカー。

はが みかげ
羽賀 御影

星辰学園理事長の令嬢にして、羽賀退魔社の社長。おっとりとした外見だが、情け容赦ない性格。

ちん せいりゅう
陳 青龍

秘密結社ORGANONメンバー。冷静沈着な策謀家。

もののべ まひと
物部 真人

フリーの呪術師。他人の苦しむ様子に興奮を覚える異常者。

くちゅり、くちゅり——。

ぬちゃぴちゃ、にちゃぬちゃ——。

触手が蠢くたび、ところどころダメになった疑似精液が粘着質な音を立てる。乳房も腹も脇も背も、糸を引く生温い呪液でぐちゃぐちゃに汚された。

「ン……あ、なんだ……ううっ!」

じわり、と肌が熱くなり、零の口から押し殺した呻きが漏れた。

異臭を発する粘液に濡れた肌が、触手のしなやかな硬さに撫でられて熱く蕩けるような愉悦を生む。淫らな呪はただの肌でさえ女性器のように敏感な部位に変えてしまうのだ。

「あ、い、いや……」

常ではない場所から生じた愉悦の波は女呪術師の不意を突き、か細い声を上げさせた。鼻にかかった甘やかな自分の声に驚き、猫目が大きく開かれる。羞恥のため、鼻の頭まで紅くなった。

「ほほう、可愛い声が出たな。我慢できなくなってきたのか？」

「ち、ちが……ううんっ!」

背中からタートルネックを潜り抜けた触手が、うなじに生温かい腹を擦りつけながら栗色の髪を掻き分け、亀頭の先で耳の裏を舐めた。その感触にゾクツとし、再び丸みを帯びた吐息が漏れる。



「ふあ……や、やめろ……呪うぞ、貴様……ううう……畜生お……」

「強情を張るなよ。挿入^{いれ}て欲しいんだらう？ 正直に言えば、楽にしてやるぞ」

「だ、誰が、そんなことを……うはうっ!？」

耳朶を弄っていた触手が、耳の穴に向けて温かい白濁液を浴びせかけた。柔肉の漏斗^{ろうと}はたちまち性器のように敏感になり、ミニサイズの亀頭に抉られると強烈な肉悦を発する。熱い快感が脳を直撃した。

「う、うわあっ！ や、やめろお……っ！」

屈辱の涙と牝の匂いを含んだ汗を撒き散らしながら、赤らんだ顔を滅茶苦茶に振り、零は叫び悶えた。その声は震え、上擦り、か弱い乙女らしい響きを伴っている。

「汚ねえな。可愛い顔がぐちよぐちよぐちやねえか」

いやらしく笑み崩れた真人が触手を払いのけて指を差し込み、耳の穴から粘液を掻き出してやると、

「ふあああ……」

耳の裏を掻かれた猫のように、女呪術師は蕩けた顔になった。

指を止め、栗色の髪で呪液を拭いながら、真人が嘸くように言う。

「頷くだけでいい。本当は挿入^{いれ}て欲しいんだらう？ 熱くて硬い肉棒で、ぐちやぐちやにして欲しいんだらう？」

「そ、そんなこと……ない……」

震える唇からは、まだ抵抗の言葉が出る。しかし桜色の陶酔を乗せて弛んだ顔は、機械仕掛けのようにカクカクと上下に動いた。身体と心が乖離している。

「ようし、いい仔だ」

真人の手が、下へ伸びた。触手の蠢きを浮き上がらせるジーンズの股間に添え、数回撫でるような動きを見せた。

「あ……な、なにを……ひあつ！」

ストッキングとパンティに、ぽっかりと穴が開く。おあずけを喰っていた触手の群が、悦びに震えながら、肉裂へ、肛門へと殺到した。激しく先陣争いをしながら肉膜を掻き分け、すでに紅く潤んだ粘膜を押し分けて潜り込んでくる。

にちゃちゃ、ぬちゅちゅ、ちゅぶ、にゅちゅちゃ——っ！

濡れた触手が擦れ合い、湿った音を立てた。猛烈な動きに肉穴がおののき、濃密な牝汁を分泌して衝撃を弱めようとする。

呪液と愛液が混じり合い泡立つ中、溪流を遡る鮎のように、触手は悦びにのたうち、くねりながら柔らかな肉奥を目指す。

「うああっ！ く、そ……う、ん……こんな……うぬくうっ！」

一秒でも早く胎内に潜り込むため、無数の疑似男根は催淫性の白濁液をびゅくびゅくと

嘔き出した。しなやかな棹部がもつれ合い、絡み合つて捻れるたび、少女の淫蜜に薄められた白濁液が泡立ち、幽かな音を立てながら弾ける。ただでさえ快感に弱い秘部の筋肉は微細な振動と疑似精液の淫呪に強制された愉悦によつてたちまち解れ、ひしめく触手の束に肉門を開いてしまった。

「あ、ああ……は、入つてくるううっ!？」

たつぷりと濡れた褌が待ち受ける膣の中へ、紅い腸壁がうねうねと蠢く排泄器官の中へ、小さな亀頭が次々と侵入し、硬い弾力で少女の肉粘膜を傍若無人に掻き撫でた。

「ふあ——っ！」

蜘蛛の糸を軋ませながら、少女の身体が反り返る。

顔を仰向け、大きく開いた唇から、愉悦の吐息を漏らす。

「ふう、ん……あ、ふあつ、ふあああ……」

触手が這い回る胸に腹に、朱鷺色の輝きが閃くように広がった。髪の毛の生え際や耳の裏、脇の下や内腿に汗の珠が浮いてくる。細長い触手が蠢くたび、前後の穴からびちゃびちゃ、ぐちゅぐちゅと淫らな音が立つ。

「う、ぬうん……う、はあくうううっ！」

いくら言葉や頭で否定していても、若い牝の肢体はこの感覚を求めてずっと疼いていたのだ。ようやく望み通りの肉悦を受け、遥かな高みへ向けて加速を始めた。

蕩けた頬を濡らすのは、法悦の涙。肉壺の中で捻れ、絡み合い、藻掻くように蠕動する触手の束は、次々と熱い疑似精液を噴き出して、内側から少女を熔かしていく。

「あ……ン……そ、そんな、どうし——うううあっ!？」

肛門に感じていた蠢きが、不意に心地よいモノに変わった。触覚や痛覚神経がないはずの排泄器官も、どろりとした呪液を受けて変性し、前の肉穴に勝るとも劣らない悦びの肉穴となったのだ。

波打つ腸壁に逆らって、触手の群は捻れた結腸を押し分け、大腸の中まで侵入する。排泄物が逆流してくるような、鈍痛を伴った感覚。しかし疑似精液の淫らな呪いに誤魔化され、強い愉悦としか感じない。

「ふあ、ふくあっ! ……ち、畜生、なんで、こんな……うん——っ!」

それは未経験の昂りであった。

見た目は十代半ばの美少女ながら、数十年以上の歳月を生きてきた零は男性経験も豊富である。しかしこのような形で犯されたことはなかった。

（こ、これは……こんな……うああっ!）

性的興奮を呪力に転換する技法を知ってはいたが、直腸から発する鮮烈な快感に意識を掻き回され、集中ができない。驚き、喘いでいるうちに身体は次々と悦びの階梯を登り、術を使うどころではなくなってしまう。

胎内に潜り込んだ触手が淫らに身をくねらせるたび、暖かな気分が湧く。身体の奥から熱くなり、全身の毛穴が開いて匂い立つ汗を噴き出す。腰がゆるゆると回転運動を始めた。蜜壺はぐじゅぐじゅと音を立ててうねり捻れ、白く泡立った大量の愛液を溢れさせる。

じゅぬちゃ、じゅにゅちゃ——。

ジーンズの染みがどんどん大きくなる。濃厚な女蜜が腿を濡らし脛を濡らし、裾から滴り落ちて床に水溜まりを作った。薄闇に濃い牝の匂いが充満する。

(くうう……こ、こんな、こと……くらいで……)

乳房に巻きついた触手が、脂肪の麓から先へ向け、ぐい、ぐいと搾乳の動きをした。血流が先端へ向けて流れ集まり、乳首が弾けんばかりに膨らむ。

青臭い白濁液と甘やかな愛液に濡れたジーンズの奥では、充血した陰核が包皮からはみ出さんばかりに膨らんで、触手の腹に擦られるたび跳ね上がるような快楽を生み、淫らかな悦びに震えていた。

白くしなやかなニョロニョロを受け入れた肛門は括約筋を弛めて肉穴をポツカリと開け、性感帯と化した腸壁が撫でられるたびに喘ぐように痙攣する。

「はぁうっ！ ふ、くふうう……あぁっ!? ううう、ん、うんうっ！」

涙に濡れる頬には、苦悶と陶醉が交互に表れていた。震える唇から憐れみを誘う切なげな声が漏れるたび、愉悦の表情が強くなる。

愛らしい反応を示す少女を褒めるように、胸や顔に絡みついた触手が蠕動を強め、一斉にどぴゅどぴゅと白く濁った粘液を噴き出した。紅く火照った頬や乳房を、どろりとした粘液が汚す。栗色の髪に点々と飛んで、いやらしく垂れながらダマを作る。淫らな呪液が肌に染み込み、むず痒いような、それでいて心浮き立つような感覚が生じた。次々と込み上げてくる桜色の陶醉に身も心も翻弄され、濡れた髪を振り乱しながら身悶える。

「そろそろ太いモノが欲しくなってきたんじゃねえのか？」
「くろう……そ、そんな、こと……」

理性の欠片が、まだ残っていた。名の知られた呪術師としてのプライドが、簡単に墮ちることを許さない。

もともと、自由を奪われ、邪淫の術で乱されていれば、抵抗は辛く虚しいものとなる。拒絶の言葉を吐いたのと同じ口が陶醉の息を漏らし、熱く火照った身体は屈服したくたくさずうずしていた。

「ほうら、無理をするな。乳首がピクピクしてるぞ」

真人が手を伸ばし、白い呪液を滴らせた紅い肉突起を抓む。

「あ……や、やめ……ふうあつ！ あつあつあああつ！」

くいくいくい、と素早く捻られると、触手の愛撫とは違う、力強くリズムミカルな快感が乳房の奥へ染み込んできた。

「んん？ どうした、気持ちいいのか？ こうして欲しいのか？」

「さ、触るな……あ、ふあう……ふああ……んふう……」

男の手が、白濁液に汚れた乳房を掴んだ。武骨な指でわし、わし、と柔らかな脂肉を揉みながら、掌底で捏ねるように押す。小指の先ほどの大きさになった紅い乳首を指の間に挟み、揉み込む動きに合わせてきゅう、きゅう、と絞ると、零は心地よさそうに目を細め、桜色に輝く頬に愉悅の表情を浮かべ、熱い吐息を漏らしながら首を振った。

男の指を、張りの増した乳房が豊かな弾力で押し返す。骨張った指の間では、紅くはちきれんばかりに充血した乳首が、乱れた呼吸と激しい鼓動を表しているかのようにピクピクと蠢いていた。掌にしつとりと吸いつく温かな肌と指を押し返す柔肉の弾力を愉しみつ、真人は囁き声で訊く。

「感じてるんだろう？ 正直に言えよ、呪い屋——スケベな顔だぜ。俺のが硬くなつてきやがった」

潤んで震える猫目、陶酔に弛んだ眉根。頬は赤らんで香汗と涙に濡れ、僅かに開いた唇は赤みを増してグミのように膨れている。蕩けた顔を、震える栗色の髪を、青臭い白濁液が汚していた。浮き上がる汗に薄められてどろりとこぼれ落ち、黒いシャツに飛び散る。

ゆっくり、ゆっくりと繰り返し返される胸への愛撫が、女呪術師のプライドを蕩けさせていく。脂肉に指が喰い込むたび脳裏に花霞が広がり、掌が乳房を押し潰すたびに熱い吐息が

溢れ出す。

肉壺の中や肛門の奥では無数の触手が紅く濡れた粘膜をねちゃねちゃと撫でさすり、強情な少女を辛抱強くあやしていた。

破れた黒シャツの下、乳白色の伸びやかな腹が緩やかに波打っている。触手のひとつがヘソを見つけて、硬い亀頭の先を潜り込ませ、疑似精液を注ぎ込む。新たな性感帯が生まれた。薄い肌を通して内臓にまで染み渡り、身体が揺れるだけで軽く飛翔してしまう。

(うう、……も、もうダメ……耐えられない……)

内と外から愛撫され、最後の理性も消え去った。身も心も肉の悦びに解れ、淡紅色の露に包まれて淫らに弛緩する。

「ふあああ……」

「そそる顔だぜ。呪い屋じゃなかったら、俺のをぶち込んでやるところだが——」

真人が呪を唱えると、膣に潜り込んだ触手の群が寄り集まり、溶け合って一本の太い男根を形作る。肛門の中にも、硬い肉棒ができあがった。

「あ、ああ……っ！ お、大きいっ！」

肉膜に強烈な太さを感じる。呪で生み出された疑似ペニスは、不自然に捻れ、恐ろしいほどクッキリと亀頭冠が張り出していた。蜜壺を、直腸を満たす感覚に、少女の息が詰まる。

「うう……ああ……」

色が白むほど伸びきった膣口から、悦びの汁が垂れ落ちてきた。性器と化した直腸からも、黄ばんだ腸液が染み出して触手の表面を濡らす。

しかし、温かな牝汁をたっぷりと含んだ肉壁が粘り着くような動きで撫で回しても、呪で生み出された長大な男根はすぐには動き出そうとしなかった。ただ、白い表皮には催淫性の粘液がうっすらと染み出していて、猫目の少女の焦燥を掻き立てている。

「どうだ？ 動いて欲しいんじゃないのか？ 可愛い声で鳴いたら、悦ばせてやるぞ」

乳房を捏ねるように揉んでいた真人が、零の耳朶に熱い息を吹きかけながら囁いた。術師をサポートするように、身体に巻きついて細い触手が脇をくすぐり、背を舐めて、頬をつつき髪を撫でる。鼻腔や唇を見つけると、小さな亀頭を押しあてて青臭い粘液を噴き出した。淫らな呪液が新たな快感を生み、肉悦への欲望を掻き立てて少女の抵抗力を溶かしていく。

しかし、

(こ、こんな奴に――)

目の前にいるのは、早苗を犯した男だ。そんな相手に膝を屈することには、強い抵抗があった。唇を噛み、膨れ上がる肉欲を必死に耐える。

「強情なガキだ。が、そうでなくっちゃ面白くねえ」

もとより真人は、他人が苦しむ様子に無上の悦びを覚える異常人格者である。零が耐えれば耐えるほど、彼の歪んだ淫心は満たされる。

「すぐに堕ちるんじゃないぞ——」

男が唇を歪めて短く呪を唱えると、零の胎内ですぬり、と触手が動いた。

「あ、ふぁ……っ!?」

胸への愛撫など比べものにならないような強い悦びが股間に生じる。思わず引いた腰の中、肉壁をそよがせる膈壁と蠕動する腸壁を撫でるように、極太の肉塊がゆっくり、ゆっくりと動く。

「あ、んん……うふう……はうあつ！」

掠れた声で叫びつつ、少女の身体が反り返る。

待ちわび、思い焦がれていた感覚。

身体の芯に火が灯る。

熱い愉悅が爆発的に膨らんで、思考を蕩けさせた。

「いい声だ。もっと強く動かしてやろうか？」

男の猫撫で声に思わず頷きそうになり、零は慌てて気を引き締めた。淫らな悦びに身体を委ねても、心だけは手放したくない。それが、呪い屋としての最後の意地だ。

「遠慮するなつて。グチャグチャにしてやる」

「あ、あうあつ!?」

触手の抽送ちゅうそうが徐々に速く、激しくなってきた。肉塊が牡蛎をたつぷり含んだ膺襞を掻き乱し、ぬめる腸壁を雄々しく擦る。零の呼吸は乱れ、声には甘い媚が混じり始めた。

苦痛と陶酔の色を交互に浮かべる、朱鷺色に染まった柳眉。猫のような丸い吊り目は零の心とは裏腹に哀願と淫蕩の表情を作っている。半ば閉じられた瞼の先では涙の珠を宿した睫毛が震え、紅く濡れ光る唇は虚しく喘ぐ。

白い粘液が点々とついた黒シャツの破れ目からこぼれ出た、淡く色づいたお椀型の乳房は、男の手に揉まれながら揺れる身体と呼吸に合わせてたぶたぶと波打っていた。肉壺と肛門の両側から同時に突き上げられると、背中がビクン、ビクンと反り返る。

「はあう……んん、ああ、あああう……ふあ、ああア……っ！」

心臓の拍動にも似た、力強くリズムカルな動き。一突きごとに熱い悦感が閃き、一閃ごとにプライドが突き崩されていく。

肉壺は滾り直腸はうねり、くねる腰に合わせて揺れる乳房は痛いほどに膨れ上がる。紅殻色の乳暈は直径を増し、その中央に屹まり立つ乳首は長さ太さを増して、紅く色づいた瑞々しい果実のように見えた。柔肉を歪めて男の指が喰い込むたび、息が詰まるほどの陶酔が湧いた。

ぐじゅうう、ずりゅぬ、ぐじゅうう、ずぬりゅ——。

のたうつ触手がジーンズに浮き上がるたび、濡れた布地の奥から肉粘膜の捲れ上がる粘着質な音が立つ。肉奥から掻き出された大量の体液が、ストッキングに覆われた伸びやかな脚を伝い落ち、ジーンズの裾からこぼれ出して床を汚した。硬く充血したクリトリスは包皮から完全に剥け出ていて、濡れたパンティに擦れ、痺れるような快感を発している。

「まだ足りねえか？　じゃあ、これならどうだ」

膣と性器を出入りする疑似男根が、周期を僅かに違え、動きを強めた。

「えあ……うやああつ！　ああうあつっ！」

悦感の極みが、タイミングをずらして前とうしろから襲いくる。熱い肉塊が子宮を追い上げ、退くと思わせておきながらうしろの触手の先が結腸へ潜り込み、亀頭の硬さに喘いでいると再び前の穴を抉られた。出入りはどんどん激しくなつて、衝撃のような快感の不注意打ちが次々とやってくる。

「ああつ！　ふああつ！　んんう……ううあつ！　ふあつ！　ああつ！　んああつ！」

紅く濡れ光る唇からこぼれる鳴咽はうねりを帯びて震え、同時に突き込まれたときには跳ね上がり裏返つた。呼吸も鼓動も肉棒の動きに支配され、乱れ、途切れてまた乱れる。

「あああうううう、くううんんああああアア……っ！　ふあ、はあうっ！」

意識は白濁し、立っているのか寝ているのか、それさえも分からなくなった。

「ア」と「オ」の中間の形に開かれた口から、息のような声がこぼれ出す。

第十章 輪姦

二十台近くのバイクが、爆音を響かせながら暗い田舎道を走っていた。衣装もデコレーションのセンスもまちまちな、混成チームである。

鉄馬の群は、街の外れにある廃工場に着いた。威圧的なほど巨大な建物が闇の中にくつも並んでいる。まるで彼らを待っていたかのように、赤錆の浮いた鉄門は大きく開け放たれていた。バイクは速度を落としながら雪崩れ込む。

彼らの行く手に、ぼう、ぼう、と青白い鬼火が浮いて、意外に広い構内を道案内した。やがて行く手に、倉庫のような大きな建物が現れる。鬼火は扉の場所を示すように留まり、しばらく揺れてから鉄扉の中に消えた。

「……ここか」

バイクを降りたライダー——いずれも二十歳に達していない、目つきの悪い不良少年たちは、鬼火が消えた扉を押し開け中へ入った。彼らを待っていた鬼火が、足元を照らしながら奥へ奥へと進む。

遺棄された機械の間を縫い、扉を二つほど潜り抜けると、不意に視界が広くなった。体育館ほどもある広間だ。全体に鬼火と同じような燐光が漂い、薄明かりの中、コンクリー

トが剥き出しの床や天井を支えている太い鉄骨などが見える。

その、広間の奥に、黒いコートを着た長身の男がいた。男の足元には、鮮やかなオレンジ色のセーラー服を着た少女が転がされている。

いましがた着いたばかりの不良少年たちは知らないが、真人の呪と早苗の巨根で犯され汚された零は、見苦しいから、という理由で着替えさせられていた。陳がニヤニヤ笑いながら着せたのは、星辰学園の制服をベースに改造した変形セーラー服である。零が普段着ている物より、かなりきわどい。

上着の丈は異様に短く、腰骨の出っぱりより下に巻きつけられたスカートとの間、形よい乳房の下端から愛らしいヘソを経てなだらかに起伏する下腹部の上端までが丸見えになっている。踝くるぶしまであるロングスカートの左右にはチャイナドレスのように深いスリットが入っていて、重ねて曲げられた優美な脚は、白くむちむちとした太腿から傷ひとつない綺麗な膝小僧、伸びやかな脛まで、ほとんどすべてがこぼれ出ていた。身体を横にしているためスカートの布地は脚から滑り落ち、床の上で捲れ返っている。閉じられている柔らかかな内腿の奥に、仄紅い秘華が見えそうになっていた。うしろに回れば、左側の尻はほとんど見えてしまっている。

先ほどまでの陵辱に身体は疲れきり、蒼褪めた頬をコンクリートの床に押しつけ力なく目を瞑って身体を「く」の字に曲げ、スリットからはみ出した長い脚を摺り合わせている

姿は非力な少女にしか見えないが、少年たちは複雑な表情で睨みつけながら、ゆっくりと近づく。呪術師を恐れているからだ。

「よう、遅かったな。もう来ないかと思つたぞ」

「スイマセン、仲間集めるのに手間取っちゃつて」

黒衣の呪術師が声をかけると、少女の傍に集まつたチンピラの数人が、阿るおもねような笑みを浮かべる。彼らは数時間前、街で猫目の女呪術師に会い、術で脅されて真人の居場所を探すように命じられた者たちであつた。

落伍者の常で、劣等感と反比例して強すぎるほどの自尊心を持つ不良少年たちは、か弱い少女にしか見えない女呪術師に顎で使われたことに深く傷ついていた。だから、ようやく見つけ出した真人と陳に「あの女を犯りたくはないか？」と逆に協力を持ちかけられたとき、二つ返事で頷いたのである。生意気な女呪術師を徹底的に辱め、二度と偉そうな口がきけないように犯し尽くすつもりで、仲間を集めてやってきたのだ。

そしていま、零は黒衣の男とチンピラたちの仕掛けた罠にはまり、彼らの足元に転がっていた。真人の声に薄目を開け、取り囲んだ少年たちを睨み上げてはいるが、瞳には力がなく、身体も動く気配を見せない。疲れ果てているために、それ以上の感情を表すことができないのだ。酷使された排泄器官は熱く痺れていた。思考は桜色の靄がかかつてはつきりせず、肉芯には陶醉の余韻が燻っている。こんな状況でなければ、意識を失つていたか

もしれない。

「犯りまくられたあとで死にそうなほど疲れているから、嘔みつきやしねえ。こうなりや呪術師も単なる牝ガキにすぎん。遠慮するな」

黒衣の呪術師は床の上に胡座あくらをかいて、組んだ脚の上にぐったりとした少女の身体を引き寄せ、力の抜けた脚に手を伸ばして幼子に小便をさせるような格好で膝を開かせる。白い腿はスリットから抜き出され、少年たちに向けてM字に開かれた。零の身体は真人の胸を枕にして折り曲げられてしまう。乳房が迫り上がったようになり、三角に開いた襟の間に覗くマシユマロのような谷間に細い顎が沈み込んだ。

「あ……や、やめ、ろお……」

呪力を回復するために声を出すのも惜しんでいたのだが、もつとも恥ずかしい場所を強調するような姿勢にはとても耐えられず、震える唇からか細い声が漏れてしまった。自分の声の弱々しさが、ますます羞恥を掻き立ててしまう。

「やめろお、だつてよ」

哀れな声から女呪術師が非力な存在に墮ちていることを確信し、どこかおよび腰だった少年たちの態度が急に大きくなった。羞恥に頬を染める少女に近づき、いやらしい目つきで眺め回す。

その目の前で、深いスリットの入ったスカートが滑ってバナナの皮のように前後にめく

れた。丸い尻と豊満な太腿が余すところなく現れる。少女の場所は、スミレ色のパンティに隠されていた。一見派手な容姿の女呪術師にしては、ずいぶんと控え目な下着である。

「なんだ、顔に似合わず可愛いのを穿いてるじゃねえか」

「中はもつと可愛いぞ」

少年たちの興味を惹きつけておいてから、真人が呪文を唱えて薄布を消した。途端、どよめきが起きる。

「毛が生えてねえじゃん！」

女呪術師の秘部は幼女のその場所のように毛がなく、肉厚の土手や抓みやすそうな大きさの肉豆、その下の肉襞までが丸見えであった。尻のほうに目を移せば、紅い粘膜の花を咲かせた肛門がヒクリ、ヒクリと喘ぐたび、胎内へ放出された白濁液の残りが溢れ出している。繊細な肉花弁は少年たちの熱っぽい視線を受けて恥ずかしそうに震えた。慌てて手を重ねて隠すが、耳元に真人の呪文。

「あ、ああ……み、見るな……っ！」

呪いをかけられた少女の細指は、妖しく蠢いて自らの肉華を開いてしまう。

「なんだよ、挿入いれて欲しいのか？」

「ち、ちが……こ、これは……」

羞恥に震えた弁明は、誰の耳にも届かなかった。少年たちは一様に目を血走らせ、白魚

のような指が紅い粘膜の襞を広げる様子を、生唾を呑み込みながらジッと見つめている。

幼子のようにつるんとした無毛の恥丘の下、肉厚の土手を左右の中指で押し開き、人差し指が紅い肉ビラを展翅していた。二つの中指が潤いを乗せた繊細な肉襞を一撫でするごとに、猫目の少女は息のような声を吐きつつ身をくねらせる。どこからともなくとろりとした蜜が滲み出し、搔き回されるとニチャニチャと音を立てながら糸を引いた。

「さっきまでアナルばかり使われていたからな。膣のほうが疼いて疼いて仕方ないそうだ。お前たちの肉棒で慰めてやれ」

その言葉を裏づけるように、少女の指が一本、膣口の中へ潜り込んだ。中で鉤の形に曲がったのか、肉穴を吊り上げるようにして縦に伸ばす。紅い粘膜の孔が、ゴムでできているかのように柔らかく伸びた。暗い肉穴の奥から白くてどろりとした液体が流れ出てくる。早苗の放った精液か、肛姦の最中に溢れていた少女自身の本気汁か――。

「い、いああ……っ！」

真人の胸に頭を押しつけ、ギュッと目を瞑って首を振る零。しかし、陶酔に蕩けた顔で駄々っ子のように身体を揺する姿は、悦んでいるようにしか見えない。セーラー服からはみ出した柔肌がほんのりと紅く染まった。オレンジ色の布地にぽつん、ぽつんと乳首の影が浮き上がる。

突然、白い光が瞬いた。

少年のひとりがカメラつきの携帯電話を取り出し、零の自慰を撮影したのだ。

「や……やめ……撮るなあ……」

弱々しい抗議など、誰も聞いていない。携帯やデジカメ、使い捨てカメラなどを持つている者はみな取り出し、パシパシとフラッシュを焚いて少女の痴態を記録していく。閃光が走るたび、零は首を竦め、顔を横に向けて唇を噛んだ。その間も、呪われた指は自らの秘華を弄り、まるで少年たちに見せつけるかのように肉ピラを広げている。

高飛車だった美少女があられもない姿勢を強制され、羞恥に震える様子は、少年たちの嗜虐心をくすぐったようだ。

「ほうら、綺麗に撮れたぞ」

顔を背けて身を強張らせている少女に蜜を滴らせる紅い肉華の映像を見せる者もいれば、「見たか？ マジだって。いまから犯るんだ、お前も来いよ！」

画像を仲間に送信して聞こえよがしに言う者もいた。

（くうう……こ、こんな奴らに……）

悔しさに唇を噛むが、疲れきった身体では反撃できない。横を向き、ギュッと目を瞑って屈辱の時間が過ぎ去るのを待つしかなかった。

「ようし、本番いこうか」

しばらくして、特攻服を着た痩せぎすの少年——西にしが、戯おどけた口調で言いながらベルト

を外した。トランクスから弾けるように飛び出してきた肉棒は、滑稽なほど細く、しかししなやかに長かった。すでに青筋が浮くほど硬直し、とってつけたような亀頭は鋭くエラを張っている。見るからに硬そうで、突き込まれたら繊細な膈壁が傷ついてしまいそうに思えた。

「や、やめ——」

フラッシュの雨の中、零の掠れた悲鳴を無視し、西は腰をぶつけるようにして勢いよく挿入した。細身のソレはほとんど抵抗を受けることなく少女を貫き、硬い亀頭の先で子宮口の辺りを叩いた。

「あ、ああアッ！」

衝撃に零は目を見張り、裏返った声を上げて息を詰まらせる。

「おふうっ！ あ、温けえ……っ！」

内部は生温かい粘液に濡れ、すっかり解れていた。歓喜の声を上げた西は猫目の少女の両腕を掴み、バンザイの格好をさせながら激しく腰を振る。

じゅっちやじゅっちやじゅっちや——。

すぐに卑猥な音が立ち始めた。濡れた肉棒が紅い粘膜を歪めながら出入りする様子を、いくつものカメラや携帯が何度も何度も撮影する。

一番槍を取り損ねたチンピラたちは、少女の周りに集まり、西の動きに合わせて揺れる

身体に手を伸ばした。悔しそうに歪んだ美少女の顔を撫で回したり、栗色の髪を指で梳いたり。西に伸ばされて隙のできた脇をくすぐり、制服の上から乳房を撫で揉み、指先で乳首の形を確かめる。大きく割り開かれた伸びやかな脚を撫でさすり、太腿の柔らかさや膝小僧の形よさ、脛の優美さを愛でた。

特攻服の少年はしばらく喜び勇んで腰を振り立てていたが、次第に怪訝な顔になり、腰の動きを変えた。左右に身体を傾けて挿入角度を変えたり、肉棒で膣奥を掬い上げるようにしてみたり——しかし。

「……ンだよ、マグロかよ」

不良少年に組み敷かれた少女は、あまりの疲労のためにほとんどなにも感じていないようだった。身体を揺さぶられることで呼吸は乱れているが、声は漏れず、悶えもしない。肉穴を犯されているだけでなく、全身をいくつもの手がまさぐっているというのに、顔はほとんど無表情で、形よい眉が僅かに顰められているだけ。膣壁はそよいでいるが入り口に締めりがなく、肉棒はふやけるだけでいまいち気持ちよくなかった。

強姦もセックスショーも、犯される女が声を上げたり身体を揺すったりしなければ味気ないものだ。西は低い声で凄んだり、少女の頬を抓ったりして反応を求めたが、零はウンともスンとも言わなかった。周囲の少年たちが罵ったり嘲ったりしても、拗ねたように横を向いて無視している。

(犯るなら勝手に犯れよ……)

どうせ抵抗してもねじ伏せられるのだ。それだったら、無駄な抵抗はせずに体力や呪力の回復に努めたほうがいい——腕の立つ呪術者らしい思いきった判断だったが、思い通りにはならなかった。少年たちだけならともかく、この場には真人がいたからだ。

「確かに、マグロじゃ面白くねえな」

黒衣の呪術師は小指の先を噛み切り、溢れてきた血で零の額に妖しげな文字を書いた。少女の猫目が、不意に見開かれる。

「……き、貴様……なにを……ううう……っ！」

人形のように無反応だった身体が、ゆるゆると揺れ始めた。頬に火照りが戻り、息に甘みが蘇る。全身がじわり、と汗ばんで、体臭が濃くなったような気がした。左右に大きく開かれた太腿に、パァッと薄紅色の火照りが広がる。

額の呪文字から力が注ぎ込まれていた。体力が回復すると、膣の中にある男性器が意識され、羞恥と屈辱が蘇ってくる。意に反して身体が揺れ、

「お、締まる締まる——っ！」

西が歓喜の声を上げた。知らず知らず身体が強張り、肉穴へ潜り込んでいるペニスを絞ってしまったのだ。

適度な締めつけを得た少年は、ホオズキのように紅くなりながらゆっくりと腰を擦りつ

けた。

ぐ、じゅぶぶぶぶ——。

音にも粘りが出てくる。愛蜜に濡れた膺は少年の怒張を包み込み、柔らかな襞を絡めて愛撫した。膺口は肉棹を絞り、蠢いて射精を求めするように揉み立てる。突き込まれると淫汁の泡を噴き出し、引き抜かれるときには大量の女液が掻き出された。

「くうう……ん、んう……ふ、あ、はあうう……」

感じまい、としても、鞭のようにしなやかな肉茎は硬い亀頭のエラで柔襞を掻き分け、掻き混ぜ、抉るように動いて自らの存在を誇示し、蜜壺がにちゃにちゃと音を立てるたびに暖かな愉悦が湧いてくる。額に書かれた呪文字は、ただ力を注ぐだけでなく、零の性感を強め、肉欲に溺れやすくする効果もあったようだ。

頬に血の気が戻り、屈辱に歪んでいた眉根は淫らに弛緩する。赤みを増した艶やかな唇からは上擦った声が途切れがちに漏れた。少年の身体の下で細い腰がうねり、押さえられた腕の先では細い指が震え、なにかを掴むように曲げられる。西の動きが激しくなると、セーラー服に包まれた胸がたぶたと音を立てて揺れた。膝が起き上がり、桃色に染まった柔らかな内腿が少年の腰を左右から挟み込む。

「元気になるお呪いだ。色っぽい声で鳴くだろうか？」

身を起こした真人は、反応を始めた少女に目を奪われている少年たちへ向けて唇の端を

吊り上げてみせた。

「ただ、ひとつ問題がある。こんなになっていても呪術師は呪術師だ。感じている間はただの牝ガキだが、休ませると嘔みついてくるかもしれん」

「え……？」

真人の言葉に不安そうな顔を見合わせる少年たち。一般人からすれば、呪術師というのは不気味な存在なのだ。先ほどまでは疲れきっていて反撃される恐れはなかったが、元氣になったのなら危険があるかもしれない。反応がなければ惜しがり、反応するようになれば恐れるとは、ずいぶんと身勝手な話である。しかし異相の呪術師は氣を悪くせず、芝居がかつた仕草で両手を広げながら、

「ずっと犯していれば大丈夫。ああああ可愛い声で鳴くだけの肉奴隷だ。幸いコイツは変態女でな。前の穴よりケツの穴のほうが感じやすいから、誰か挿入てやれ」

肛姦をけしかけた。

汚らしい排泄器官へペニスを挿入することには抵抗があるだろうに、膣に挿入している西があまりにも幸せそうな顔をしているためか、少年たちはほとんど躊躇わなかった。繋がった二人に手を伸ばし、横に転がして上下を入れ換える。

「ふああ……っ！」

少年の腰に跨った格好にされた零は、喉を反らして息を吐いた。自らの重みで男根を奥

深くまで受け入れてしまったのだ。硬いペニスは挿入角度を変え、膣奥を抉るように突く。長くしなやかな肉棹は子宮頸部を押し上げ、揺さぶって爆発的な快感を生んだ。胎内に生じた快樂の爆風に吹き飛ばされるように身を振ると、肉穴が捻れ、

「うほっ！ た、たまんねえ……っ！」

不良少年が歡喜の声を上げた。体力に任せ、下からドンドンと突き上げてくる。

「はあうっ！ あ、あああっ！ やあっ！ んっくううっ！」

肉棒が秘奥を直接押し上げるため、少女の身体は荒馬に跨っているように激しく揺れた。顔が天井を向くほど反り返ったかと思うと、次の瞬間には特攻服の胸にしがみついて背を丸める。スカートのスリットからはみ出した乳白色の太腿はなにかに焦れているように小刻みに揺れ、みっちり詰まった脂肪がぶるぶると震えた。

栗色の髪を振り乱し、汗と涙をこぼしながら身悶える少女の背を、太い腕が押した。再び角度が変わり、零は特攻服の襟にしがみついて呻く。少年の胸に押しつけられた乳房がつきたての餅のように柔らかく潰れた。

スカートが捲り上げられ、色合いも形状も大きな桃の実のような尻が露わになる。覗き込めば、汗が果汁のように滴っている会陰部の下で、少年の男根を啜え込んだ肉裂が蜜に濡れながら歪んでいる様子が見えた。

「ケツは俺がもらうぞ」

鎧のような筋肉に覆われた裸の上半身に袖なしのジージャンを羽織った、スキンヘッドの大柄な少年——清川きよがわが、丸太のように太い腕に力瘤を見せながら身を乗り出した。威圧的な態度の前に、文句を言う者はひとりもない。

両掌に唾をかけて男性器に塗り込んだ少年は、妖しく揺れている少女の腰を捕らえ、紅い粘膜の華を咲かせている菊門へ拳のような亀頭を押しあてた。

「あ……そ、そこは——あぁっ！」

ダメ、と言いきる前に、ソレは力強く潜り込んできた。あまりの太さに、零は大きく口を開けて声にならない悲鳴を上げる。早苗に酷使された排泄器官は柔らかく伸びて少年の肉塊をどうにか受け入れた。長さがなかったため亀頭の先は結腸の手前で止まったが、それにしても太い。薄い肉膜越しに、腔に収まっている西の男根を押し潰すほどである。

「おお、締まる締まる。ぬるぬるして、案外気持ちいいモンだな」

目を細め、顔を綻ばせながら清川が呟く。肉塊を押し込まれた直腸壁は生温かい腸液を滲ませながら頻りに粘膜を波打たせる。腔壁のように襞はないが筋肉は強く、硬い淫棒を排泄しようとして強く強く絞り立てた。それが、少年の巨根には心地よい刺戟となって、性器に勝るとも劣らない快感を生むのだ。

清川はひなたぼっこをしているライオンのような表情をしながら、ゆっくりと腰を引いた。肛門は紅い粘膜を捲れ上がらせ、肉茎に絡みついて柔らかく伸びる。苦しみが急速に

引いて、少女は長く深い溜息をついた。しかし、少年はすぐに突き戻す。逆流する肉塊に腸壁は慌てふためき、蠕動を強めた。男根は激しく揉み立てられ、逞しい少年に悦びの声を上げさせる。

「うおお……おお……コイツはいい……っ！」

徐々に速まる腰遣い。力強い動きに合わせ、荒波に揉まれる小舟のように零の身体が激しく悶える。

(あ……ああ……ど、どうして……!?)

捲られ、押し込まれ、また捲られているうちに少女の肛門は次第に熱を持ち、重苦しい快感を生むようになった。触手の呪液の効果が残っていたのか、早苗に犯されて開発されてしまったのか——とにかく、いまは苦しいだけではない。太い肉塊が出入りするたびに排泄口に快感が閃き、背骨を揺すって全身を解していく。

身体の芯から熱くなってきた。少年が尻を突くたびに少女の細い肢体が揺れ、髪の毛の生え際や耳のうしろに浮いた香汗の珠が飛んで淫らな牝香が撒き散らされる。西の胸に押しつけられた乳房は張りを増し、身体が揺れるたびに捏ねられて暖かな気分が満ちてきた。制服の裏地に擦れた乳首からはピリピリとした鋭い快感が染み込んでくる。腰を跨いでいるために左右に大きく開かれた脚はほとんどすべてがスリットの外にはみ出しており、清川が動くたび、桜色に染まった柔肌に細波さざなみが起きる。

「ああう、ううう、うああああ……ああああうう」

西の上で犬のような四つん這いとなり、清川に尻を犯されている少女は、力ない嗚咽を漏らし始めた。胎内にある二つの男根は秘肉を挟み込んで強く揉み上げている。ペニスの裏側の形状が肉穴の粘膜を擦り立て、そこからピロードのように滑らかな陶醉が湧き上がる。一方で、呪術師としてのプライドはまだ存在し、二人の少年に貫かれて悦びを感じてしまう自分の身体を恥じていた。込み上げてくる快楽を拒み、必死に理性を繋ぎ止めている。

「ち、畜生……蕩けそうだぜ」

二人分の重みを受けた西はさすがに身動きができなくなっていたが、清川の動きが肉膜越しに陰茎をしごき、射精衝動は高まっていた。零が肛姦に感じ始めると膣壁も蠕動を強め、愛蜜をたつぷりと含んだ肉襞で硬い淫棒を揉み上げる。清川の動きが速まると、少女の身体が激しく揺れて心地よい刺激も強くなる。

「くうう、た、たまんねえ……うっ！」

痩せぎすの身体がビクン、と痙攣した。子宮頸部に頭をぶつけていた亀頭からびゅくびゅくと、熱い粘液が迸る。

「あああ……な、中に出すなあ……」

胎内に生温かく重い汚辱の液を感じ、零は弱々しく啜り泣いた。少年たちに力づくで押

さえ込まれ、犯されてしまった——非力な少女のような自分が、たまらなく哀しい。

西のしなやかな男根が、湯気を立てながら抜け出ていく。紅い肉華はぐじりと湿った音を立てながら捲れ上がり、嘔き出されたばかりの白濁液を溢れさせた。

「次は誰だ？ 早くしろ」

胡座をかいた脚の上に少女を座らせ、膝を揺すって跳ね上げながら清川が言った。脇の下に腕を通し、セーラー服の上から零の乳房を揉んでいる。武骨な指が沈み込むたび、猫目の呪術師は上擦った声を漏らした。少女の白い手は清川の大きな手を引き剥がそうとしてその甲に添えられたが、押し寄せる愉悦のために力が入らず、骨張った指を愛でるように撫でることしかできない。

「そうら、こんなになつてるぞ」

少年の手が下に伸び、スカートの前布を引き上げた。揺すられるまま波打っている柔らかな腿肉のつけ根、男を受け入れるための肉鞘は、西のペニスに挟られた赤黒い口をポツカリと開けたまま、ヒクヒクと蠢いて奥から泡立った交合液を溢れさせていた。充血したクリトリスは完全に莢を抜け出し、粘液に濡れて肉真珠という俗称に相応しい輝きを放っている。

「や、やめろお……！」

慌てて隠そうとする零だが、ニヤついた少年が膝の揺れを強くすると途端に貫かれた尻

の穴から断続的な激感が生じ、意思を挫かれてしまう。スカートを押し下げようとして伸びた腕は途中で止まり、再び乳房を揉んでいる手に添えられて太い手首を撫で始めた。

俺が犯る、と前に出たのは、松居まういという名の大柄な少年である。零の股間に肉棒を寄せると、頸部を握り、亀頭の先で濡れ光る肉華を軽く搔いた。敏感な肉塊に触れる温かな粘膜の感触を愉しみつつ、女呪術師の反応を観察しながら、精液に汚れた褌の縁をゆつくりと擦っていく。犯された直後の肉花弁は男根の硬さを感じ、待ちきれないようにふるふる震えた。触れられた場所が欲情し、熱を持つ。感じてしまう自分が情けなく、死にたくなるほど恥ずかしい。

「や、やめ、ろ……へ、変なこと、するなあ……」

「乳首をこんなにおっ勃てといて、よく言うぜ」

紅く色づいた耳朶に舌を這わせながら、ニヤニヤと笑った清川が制服の下に手を差し込み、二つの肉突起を直接抓んだ。

「はうっ！」

途端に零は息を吐き、背を反らせて震える。抓み伸ばされ、痾り具合を確かめるように指の腹で捏ねられると、乳首から乳房へ清冽な快感が染みてきて、息が乱れた。悦びに身体が捻れ、喉が震えて甘い声が出てしまう。上着とスカートの間に覗く腹が、荒い呼吸に合わせて波打った。柔肌は薄紅色に染め上げられ、滲んだ汗のためにぬらぬらと光って見

える。大きく開かれた内腿の筋肉が緊張し、火照った肌に細波のような震えが起きた。スカートの上で、重みに潰れた尻肉が柔らかさを見せつけるようにむにゅ、むにゅ、と形を変える。紅く染まった肌に滲む汗は、熟れた果物から染み出す甘い蜜のようにも見えた。

「こいつが欲しいんだろう？ 挿入てやるぞ」

肉棒を少女の愛蜜で濡らした松居が、覆い被さるように身体を倒し、ゆっくりと腰を沈めた。ようやく望みの硬さを感じた壺口は悦びにヒクつきながら伸び、紅く艶やかに光る亀頭を呑み込んでいく。

「あ……ああ……っ！」

胎内に侵入してくる太さに、零は上擦った声を上げた。いくら犯された直後で濡れていても、最大径部が五センチほどもある巨根である。肉穴は限界まで伸びきり、重圧に息が詰まりそうだった。

「ちっ！ きついな」

少年が苛ついたように腰を捻りながら体重をかけると、大きな亀頭がようやく狭い膣口を越えた。奥は広く、茎部は意外にすんなりと沈み込んでいく。肉棒が蜜をたっぷり含んだ壁に優しく包み込まれ、松居の巖つい顔がとろんと綻んだ。

再びの熱塊に、膣洞は少女の意思を無視してぐじゅりぐじゅりと蠕動する。その動きは

会陰部奥の薄い肉膜を経て直腸にも伝わり、清川のペニスまでも絞り立てた。紅くゼリーのように柔らかい直腸壁は生温かい腸液を滲ませ、波打って淫棒を愛撫する。

「お、俺、もうダメだ。出したい……………」

性器を揉み立てられた清川がたまらずに呻くと、松居は少女の背に腕を巻きつけ、仰向けになった。零は少年の太い胴に跨り、頬を厚い胸板に、手を床についてまたしても犬のような姿勢になる。

「うう……………あつ！ あああつ！」

四つん這いになった少女の尻を、清川は激しく突いた。前の穴に太いモノを挿入られたため、直腸が狭まりキツイほどだが、爆発寸前の男性器にはそれくらいがちょうどいい。心地よさに細められた目で美少女の苦しげな横顔を見下ろしながら、少年は急速に登り詰めた。少女を待つことなく、秘奥にどぷりどぷりと精を放つ。

「……………」

結腸の中へ遡ってくる熱い粘液の不快感に、零は唇を噛んで震えた。しかし意識はともかく、身体は感じているようだ。セーラー服の襟から伸びる細いうなじに血が上り、薄赤く染まった柔肌じつとりと汗の被膜が浮き上がる。甘く淫らな匂いが濃くなった。

息を荒らげた清川が、少女の尻に手を置いてゆつくりと腰を引いた。肉棹が紅い粘膜を巻きつけたまま抜け出てくる。抽送で解されたのか粘膜は柔らかく伸び、男根がすべて抜

けてしまったあと、もぼっかりと紅暗い穴を開け、少女の呼吸に合わせて喘ぐように震えていた。数秒して、奥のほうから薄茶色の腸液とともに、まだ湯気を立てている白濁液が溢れ出してくる。

「ようし、今度は俺の番だ」

喜々として言った松居が身を起こし、抜けてしまわないよう慎重に姿勢を変えながら、零の背中をそつと床に降ろした。オレンジ色の布に包まれた乳房を揉み解しつつ、少女の赤らんだ顔を覗き込みながら、グイッと腰を擦りつける。

「あああ……んん……あ、ふああ……」

肉棹に擦られた入り口に、愉悅が生じた。思わず脚を少年の腰に巻きつけてしまう。細い腕で少年の首にしがみつき、気がつけば腰まで揺れている。

「コイツ、感じてやがる！」

「呪術師なんて粹がついていても、女は女だな。チンポ突っ込みやヒィヒィ鳴いて、自分から腰を振り始めるぜ」

痴女のような振る舞いを見せる零を、少年たちは指差して嘲笑った。呪術師という存在を普段から恐れ、疎ましく思っていた反動だろうか。このときとばかりに囁し立て、卑猥な言葉を浴びせて猿のように騒いだ。さまざまな角度からフラッシュが焚かれ、零の羞恥を掻き立てる。

(く……くそお……こんな奴らに……)

怒りが込み上げてきた。数を待たのまなければなにもできない、屑のようなチンピラたちである。このままだら犯され、嘲られていることは、呪い屋のプライドが許さなかった。幸い、少しずつ溜めていた呪力がある。一度くらいなら呪を放てそうだ。少年たちを直接攻撃するには足りないが――。

「――ッ!？」

少女の中の心地よさにうっとりとしていた松居が、いきなり声にならない悲鳴を上げて飛び退いた。身体を曲げて両手で押さえた股間から、鮮血が噴き出してくる。見れば、大きく割り開かれた少女の股間で、鋭い牙を生やした女性器がガムでも噛んでいるかのようにクツチャクツチャと蠢いていた。肉壺の奥から、少年のペニスだったらしい肉の欠片が大量の血と淫液に押し流されてこぼれ出てくる。

「はっ! ざまあないねっ!」

蒼褪めたチンピラたちを睨め回し、呪い屋は精一杯性悪そうに叫んだ。

「アンタたちのフニヤチンじゃ、アタシをヒイヒイ鳴かすことなんてできないよ! さあ、お次は誰だい? 何本でも喰ってやるよっ!」

しかし零は、ひとつ大きなことを忘れていた。この場にいる呪術師は、彼女だけではないのだ。

「自分の身体を呪ったのか？ さすがは呪い屋、やることがえげつねえ」

腰の引けた少年たちを押し退けて、唇の端を歪めた真人が現れる。猫目の少女は息を呑み、己の不用意さを呪った。しかし、もう手遅れである。

黒衣の呪術師が短く呪を唱えると、性器に生えた牙は簡単に消え去った。もう呪力は残っていない。零の背を、冷たい絶望が這い上がってくる。

しかし、いやらしい呪術師はそれだけで許そうとはしなかった。

「どうもまだ、自分の立場が分かってないようだな。お前はもう呪い屋じゃない。こいつらの玩具なんだよ」

零の身体を抱き起こすと、鼻歌を歌うように低く呪文を口ずさみながら、血の滴る小指で紅を引くように少女の唇をなぞる。

「これで口も性感帯だ。ペニスを近づけてみな」

傍にいたライダースーツの少年——高梨たかなしが、半信半疑ながらジッパーを開け、肉棒を取り出す。包茎のソレはすでに硬く強張り、薄皮の先から赤らんだ亀頭の先を覗かせていた。自らの指で皮を剥くと、粘液と体温に蒸れた本体が現れる。牝香の漂う薄闇に、強烈な青臭さが混じった。

「う……い、いや……」

鼻先に臭気を放つ不衛生な男根を突きつけられ、失意の女呪術師は弱々しく呻いた。匂

いの濃さに頭がぐらりとする。しかし――。

「うえあ、ああ……あああつ!!」

呪われた唇は少女の意に反して開き、中から紅い舌が伸びてきた。生臭い肉塊に向けて首を伸ばし、貪るようにしてしゃぶりつく。

唇に熱い弾力を感じた。

途端、触れた場所から緋色の陶醉が染み込んできて、少女の意識を溶かしてしまう。真人の言葉通り、少女の愛らしい口は性器のような淫らな肉穴に変わっていたのだ。

(こ、こんな……こんなのって……)

汚らわしさと屈辱に、女呪術師のプライドが軋んだ。しかしペニスに触れた口唇からは麻薬的な愉悦が湧き上がり、別の生き物のように動く舌や唇を止めることができない。肉悦に導かれるまま、ようやく届く距離にある男根へ向けて身体が傾き、狂おしく吸いついて生臭い亀頭を舐め回してしまう。

「お、巧いじゃん」

包茎の少年は悦びに震えながら、少女の頭を掴んで腰を寄せた。口腔内に侵入した陰茎は頬の内側や上顎にぶつかりながら、ついに咽頭蓋を叩く。

(――っ!)

クリトリスを弄られたときのような、鮮烈な悦びが閃いた。少女の身体は反り返り、ピ

クビクと痙攣する。顔の赤みが増し、頬が淫らに弛緩した。猫目はうっとり細められ、涙に潤んだ瞳が焦点を失って揺れ始める。

唇が閉じ、肉棒を支えた。少年が腰をゆつくりと回すと、男根は零の口腔内ですりこぎのように動く。舌、歯茎、頬の内側、上顎——熱く硬い淫棒に触れられると、性器と化した口唇からはめくるめく快感が湧き起こった。呪いのせいだと分かっている、それを跳ね除けたいという気持ちはどうしても起きない。次々ともたらされる快楽に意識は蕩け理性は弛み、淫靡な生き物へと堕ちていく。

(ああ……す、凄い……これ、凄い……)

少年の腰を押し退けようとして上げられた腕で、逆にライダースーツを掴み、グイッと引き寄せてしまう。唇で肉茎を絞りながら自ら首を捻り、頭を前後に振ってじゅぶじゅぶと音を立てた。

身体の奥が熱い。襟から覗くむっちりした乳房の谷間には蜜のような汗が浮かび、身体が揺れると紅く染まった脂肪の狭間へ流れ落ちていく。スカートの内側では、塞がれていない女性器が悦びの棒を求めてヒクヒクと喘いでいた。充血した肉豆は自ら包皮を押し退け、粘液に紅濡れた表面を光らせながら愛撫を求めて震えている。

「んっぶ、じゅぶ、んじゅば、ん、ん、んう……」

零は法悦の涙を流しながら、栗色の髪を振り乱してペニスをしゃぶった。汗の珠が浮い



た鼻先が少年の剛毛の中に埋もれ、男の体臭をたつぷりと吸い込めば、精悍だった猫目がとろんと細められる。思いきり頬張るために唇は縦に伸びきり、赤黒い肉塊が出入りするたびに捲れ返って泡立った唾液を垂らした。

首だけでは肉悦が足りなかったのか、少女はライダースーツにしがみつき、身体全体を揺らし始めた。膝立ちになり、少年の脚に乳房をぶつけるようにして背を波打たせる。スカートのスリットからはみ出した太腿はほんのりと紅く染まり、淫汗に濡れてぬらぬらといやらしく輝いている。

高梨の腰を狂おしく貪る半裸の女呪術師は、順番を待つ少年たちの劣情を強く掻き立てた。股間は内側から突き上げられて山になり、無意識のうちに撫で回している者もいる。

「も、物部さん、他にないかないんですか？ 俺たち、もう……」

哀れな声で求められた異相の呪術師は、ライダースーツにしがみついている少女の手を取り、甲に呪文字を書いた。

（あ……!? な、なに……？ なにを……ああ！）

掌が急に熱を帯びた。指がむくんだようになり、汗が滲んでくる。握り込むと触れ合った皮膚に暖かな快悦が生まれた。くちゆり、とまるで潤みきった性器のような音がする。

「さあ、これで手も感じるようになったぞ。誰か握らせてやれ」

茫洋とした表情の大柄な少年——恵藤が進み出て、茹で上がったばかりのフランクフル

トのようなペニスを取り出した。少女の掌に乗せると、五本の細い指はするりと曲がり、肉茎を包み込んで妖しく蠢き始める。

「お、なんだコレ……ねちよねちよじゃねえか」

少女の白い手指は淫液のように濃く熱い汗でじつとりと濡れていた。小さな手が肉棒をしごき始めると、粘着質の音が立つ。指の間からはとろりとした汁が染み出し、手首を濡らし肘まで垂れた。制服の袖がみるみるうちにぐっしょりと濡れる。

「おお、おお、おお……たまらねえっ！」

恵藤が手淫の心地よさに呻いているとき、ペニスをしごいている零も肉悦に喘いでいた。手の中に握り込んだ肉棒の弾力にどうしようもなく心が浮き立つ。指を動かすだけで気が遠くなるくらいの快悦を覚え、掌に擦れると舞い上がるような気分が湧く。

(い、いや……こんなの、いやだ……)

嫌悪と屈辱に涙しながらも、手や口が動くのを止められない。身体を動かすたびに暖かな薄紅色の波が打ち寄せ、思考や理性を溶かしていく。麻薬的な悦びが、女呪術師を後戻りできないほど冒していた。暗く淫靡な穴へずるずると堕ちていくのが分かるのに、どうすることもできない。

反対側の手にも呪文字を書かれた。熱い強張りが押しあてられると、思わず握り込み、激しくしごいてしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>